

地名の魅力・楽しみ方

～市原市内を中心に～

【はじめに】きょうは、「市原市の地名 地名から歴史を探る」を大きなテーマに、日ごろ身近だが意外と気にしていない地名の魅力と楽しみ方についてお話します。自分の故郷や現在住んでいる場所（地名）に愛着を持っている人は多いでしょう。日本全国には、現在1000万件以上の小字ほどの名称があるといわれています（地名の由来を知る事典・武光誠著）。市原市に限っても多くの大字、小字があります。まず市原市の名称「市原」。由来はどこからきているのだろうか。「市原の地名」（田中喜作氏）、「地名の由来を知る事典」など地名関係書籍を参考に探っていきます。

（一）市原の地名由来を考える。なぜ市原なのか

「市原の」地名は、すでに1300年前の奈良時代に存在していた古代から伝わる名称です。由来（語源）は諸説あるようです。市原市の郷土史家・田中喜作氏の労作「市原の地名」（市原地方史研究第18号）では、諸説挙げるなかで、「山城国にも櫛原があってイチハラとよんでいるから当市原（市原市）も櫛原ではないか」と「櫛（いちい）の樹木・イチイガシが台地に広がっていた」説に賛意を示しています。確かに、現在も京都・洛北の私鉄沿線に「市原」という地名と駅名が存在します。でも、櫛原（いちいはら）が市原になったのは鎌倉時代頃らしい。通説ではイチイガシ説が一般的なようです。ここで私論を述べたいと思います。古墳時代のころ。市原台地の下は、条里制の田んぼが広がり、台地上は整備（住居環境）が終わっていたのではないのでしょうか。それに伴い、「市場」が開かれた大きな広場（原）が存在したから「市原」になったと考えています。「市原」を論じるには、市原市内にあった「上総国府」の存在を無視できません。「上総国府 市原郡に在り」と平安時代の漢和辞典・和名類聚抄（和名抄）に記載があります。市内門前に人市場（ひといちば）という小字があります。往古に人身売買の市が立ったのかと想像させる名称です。しかし、古代の歴史に詳しい元市原市埋蔵文化財調査センター学芸員の宮本敬一氏は、人市場は上総国のなかで、一番早く開かれた市場「親市」ではなかったかという「国符市庭」説を示しています。

（八幡公民館主催講座「上総国府再考・上総国府の所在地—地名から考える—」）

門前・郡本、市原地区は有力な上総国府（国衙）跡の有力推定地。現に、長野県安曇野市には、JR大糸線「一日市場」駅があります。近くの松本市に信濃国府跡がありました。下総国府跡は市川市国府台地区に存在が確認され、川のそばに「市」が立ったから市川。市原も「市」が立った場所（原）」だからと考えるのが自然のような気がします。

(一) 市原市誕生

市原市は、昭和38年(1963)5月に市原、五井、姉崎、三和、市津の5町が合併して県内19番目の市として誕生しました。そして、昭和42年10月に南総町と加茂村が加わり、現在に至っています。当時の人口は約124000人、世帯数は約31000戸でした。市域は約360平方kmで県内一番の広域都市。これまでの閑静な農漁山村から京葉臨海工業地帯の中心都市に変貌しました。新しい時代「令和」の現在は、人口約276000人、世帯数は約126700戸です。発足当時から比べると、人口で約2・2倍、世帯数で約4倍の伸び率を示しています。データからは定住人口が伸び悩み、少子高齢化、単世帯数が伸びているのではということが読み取れます。

ここで、合併前の7町村の名称由来にふれます。市原町(古くからある郡名から)、五井町(養老川の河口に立地した川由来か=市原の地名=。五井の名称は古く天正時代(1590)の記録があり、この地方の中心地で名が知られていたから)、姉崎町(格式のある式内社の姉崎神社の立地から)、三和町(海上村、市西村、養老村の3村合併で、和合の精神が込められた)、市津町(市東村と湿津村の合併による合成地名から)、南総町(上総南部の代表的な意味から)、加茂村(古代の加茂郷に属していたから)と、それぞれ町村名が命名されました。県内に長生郡と山武郡があります。ともに上総国に属していましたが、明治時代に古代の長柄郡と埴生郡が合併し長生郡。山辺郡と武射郡が合併して山武郡と合成地名になった歴史があります。

明治の中ごろまでは、市原市内に1宿171村ありました。それが明治22年に1町20村に、その後に姉崎、五井、牛久、鶴舞が町制施行。すでにあった八幡町を加え、戦後の新憲法下で5町16村体制になりました。さらに合併が進み、旧来からの市原郡が消滅して、市原市として歩んでいます。

(二) 地名を楽しむための基礎知識

日本全国に1000万以上の大字、小字の地名(名称)があり、手紙やハガキ、宅配など生活に密着した欠かせない存在です。幼い頃あったなじみの地名が消滅したり、新たに町名(地名)が誕生したりしています。何気ない地名ですが、ある程度の基礎(法則)を知っていると、「日本地図」を眺めるのが楽しくなってきます。地名には、大きく分けると「自然地名」と「文化地名」があります。自然地名は多様で、川や山、野・原、谷、坂など。なかでも、川に関する地名がもっとも多いそうです。文化地名は、人為的な営みがあったときに自然地名から文化地名に変わるといいます。市が立ったところに四日市、六日町など市にちなむ地名。港があった場所の木更津、君津、沼津、大津など。八幡や熊野、成田など特定の寺社に関する地名。例えば、江戸は自然地名です。大きな川(江)の出口(戸)にあった。隅田川の東京湾(江戸湾)の出口にあたることから。東京は文化地名になります。千年の都だった京都に対して、東の方角にあるから。市原市の八幡や姉崎は文化地名です。

古代から伝わる“名称”からも、その場所を読み取ることができます。【久保(窪) =クボ =】くぼ地の意。久保(市原市)、大久保、荻窪(東京)【前(崎) =サキ =】ミサキのミは

接頭語、サキは先。海、湖に突き出した陸地。岬、埼、崎も同義。玉前（市原市）、玉前神社（千葉・一宮町）、犬吠埼、洲崎、野島崎（千葉）など。【津（湊）＝ツ＝】港があった場所。全国に70カ所以上（平成の大合併前）あるという。大津（滋賀）、津（三重）、唐津（佐賀）、宮津（京都）など。千葉県にも多くみられます。富津、君津、木更津。ヤマトタケル東征に伴う弟橘媛の説話にちなんでいます。袖ヶ浦もそうです。【サタ】サ（狭い）、タ（所）で、狭く細長く伸びた土地を意味します。大隅半島の日本本土・最南端の佐多岬（鹿児島）、四国最西端の佐田岬（愛媛）。【須賀、渚（スカ）】川や海の砂州。洲のあるところ。横須賀（神奈川）、長須賀（木更津、館山）、横渚、貝渚（鴨川）。奈良県（大和国）の飛鳥（明日香）と呼ばれた所は飛鳥川沿いの低湿地だったが、渡来人の東漢（やまとのあや）氏が開拓し、そこに住み着いた。東漢氏が「すばらしい砂州の土地」として“あすか”と名付けたという（地名の由来を知る事典）。

（三）市津の地名あれこれ

市津公民館での講座ですので、市津地域のいくつかの地名について由来（語義）を探りたいと思います。まずは市津公民館や市役所支所があり、行政・文化の発信拠になっている【下野（しも）】地区。そのほかに、市津地域には【中野】があります。長柄町には【上野】という地区があります。これらの地区を訪れてみると、上、中、下と微妙に上野地区を頂点に標高差があることが分かります。野原という言葉。地名由来では、「野」と「原」は違うのだという。原はある程度開拓（墾）した台地や平地。野は主に斜面上の原野をさすのだという。市津地域の古代の様子をみると、国分寺建立の瓦を焼いた瓦窯跡、鉄の精錬跡、国分寺の所領田がありました。このことから、上総国（国府）と市津地域は密接な関係にあったようです。わたしは、「下野」や「中野」は上総国の軍馬や農耕馬などを生産していた「牧」（放牧場）からきているのではないかと考えます。中野地区には、日蓮宗中本山の経王山（けいおうさん）光徳寺があります。「羅漢像と紫陽花のお寺」として知られ、四季折々の花々が訪れる人たちを和ませています。羅漢像は、比較的新しいですが、さまざまな表情を見せる“羅漢さま”と対話をするのも楽しいです。【瀬又】瀬又地区は、村田川と瀬又川が合流する地点にあります。セは狭い所。山などが迫った場所の意味（市原の地名）。かつて瀬又地区で「背俣（せまた）」という墨書土器が見つかっているという。そのほかの河川も村田川や瀬又川に合流しています。瀬又地区は“盆地”状の立地。古代は上総と下総の境川（村田川）を通じて、上総国府への窓口になっていたのではないのでしょうか。ちなみに、河川の合流地点からは落合、川合、河合、川相、会川、相川などの名字が生まれています。【番場】ババ（馬場）のことか。馬の訓練場所？（市原の地名）。番場周辺（ちはら台も含む）は、押沼に古代の鉄精錬跡遺跡などがあり、馬具生産や武器製造など上総国の“工業地帯”だった可能性があります。そのほかの説に、隣接する地区とのトラブルで番小屋がたつたから（市津の民話）などもあります【東国吉】かつて、市原市内に国吉という地名（名称）は、市東地区と牛久地区の2か所存在していました。混同するからと、明治の初めに東国吉と西国吉に分かれました。国吉の名称はいすみ市にもあります。国に吉というめでたい佳字です。東国吉

の八幡神社前の三差路は、潤井戸・下野方面と茂原・本納方面、瀬又・中野方面をつないでいます。

【西国吉】牛久地区にある西国吉。国道409号沿いにある交通の要衝です。西国吉には、戦国武将の浅井長政（浅井家）ゆかりの寺院があります。真言宗豊山派の中尾山医光寺というお寺です。近くには、ゆかりの国吉神社もあります。なぜ市原市に、織田信長との戦いに敗れ、お家が断絶したはずの浅井家とゆかりの寺が存在するのでしょうか。30年くらい前に、医光寺に江戸幕府・2代将軍徳川秀忠の正室・崇源院（お江）の木像（座像）が存在していることが新聞報道で明らかになりました。調べで、当地（西国吉周辺）を領していた旗本・三好家が浅井家の後裔だということが分かりました。お江の関係で、幕府もお家断絶はしのびないと、旗本として後世まで残したのではと考えられています。

（四）新しい地名（町名）・開拓地名

新たに原野や田畑を開発し、宅地造成された土地に付けられて地名を「開拓地名」と呼ぶそうです。多くは美名がついています。市原市内も、新しい街（タウン）日々誕生。それらの地名由来を数カ所紹介します。

【更級】市原市にゆかりのある「更級日記」に、ちなんでつけられた地名（名称）です。JR五井駅東口近くに、大型商業施設が誕生したのに伴い、住居表示で「更級〇丁目」という名がつけました。JR五井駅東口前から国分寺台方面に延びている「更級通り」が通っていることも命名の参考になりました。駅前には、更級日記の作者・菅原孝標女が京の都へ旅立つモニュメントが建っています。更級通り（古代道）は、その当時は通っていたのでしょうか。答えはNOです。行政が国分寺方面につながっているからという理由から「更級」名称を採用したのです。いまだに所在地が分からない上総国府跡。こうした中で「更級〇丁目」の名称がつけました。「更級」だらけの名称に、後世の人たちが絶対に存在しない五井東口前の“上総国府”を信じてしまうでしょう。地名は大事だと思います。古代道は、市原地区の台地から五所小学校方面に延びているのが確認されています。来年の2020年は、上総国司（介）の任期を終えた菅原孝標一行が、上総の地（市原市）を旅立って1000年紀にあたります。さまざまな関連イベントが行われることでしょう。これを機会に、市民一人ひとりが歴史の事実や重みを共有する必要があります。

【国分寺台】市原市役所が建つ周辺一帯が区画整理事業で誕生した「開拓地名」です。開発に伴い日本最大級の上総国分寺跡、日本最大規模の上総国分尼寺跡の全容（姿）が明らかになりました。国分寺の存在が名称の由来です。そのほかに、東日本で最古といわれる神門古墳群、日本最古の文字といわれる「王賜」銘鉄剣が見つかった稻荷台1号墳、縄文時代の西広貝塚跡など貴重な遺跡が次々に確認されています。しかし、発掘調査で期待された「上総国府跡」は、国分寺台では確認されていません。ちなみ、現在までの上総国府（国衙・国庁）跡の推定地は、①市原②郡本・門前③能満④村上一の4地区が有力候補に挙げられています。

【若宮団地】若宮の名称は、隣接する菊間地区にある若宮八幡神社から「若宮」がつけ

られました。若宮八幡神社は菊間国造が、白鳳年間にヤマトタケル、タケミカヅチの2柱を祀ったのが創建と伝えられています。その後、源頼朝が治承4年(1180)に鎌倉の若宮殿の主祭神・仁徳天皇を奉遷したという。八幡の飯香岡八幡宮と密接な関係にあります。若宮団地は、千葉県住宅供給公社が開発、分譲しました。市原市内では早い分譲で、人口は約4620人。自治会加入世帯は1620世帯(平成27年12月)現在。市内の分譲団地では、65歳以上の高齢者が占める割合が44%で最高だという。地域活性では、少子高齢化対策が大きなテーマになっています。

【ちはら台】昭和50年代はじめに、現在の都市再生機構(UR)によって、草刈地区や市東地区の山林原野が開発され、分譲が始まりました。総面積は約87ヘクタール(東京ドーム約18個分)と広大です。千葉市と市原市が開発地域がまたぐために、合成地名の「ちはら台」と命名されました。当時は標高が高いところで約60mありました。開発でなだらかに整地され、住みやすい街(場所)になりました。発掘調査では、旧石器時代から中世までの貴重な遺跡が確認されています。往古も住みやすいところだったのでしょう。現在のちはら台の人口は、約27000人。世帯数で約9680世帯です(2019年4月1日現在)。今でも、人口と世帯数が微増している、発展著しいニュータウンです。

(五) 地名からルーツをさぐる＝「山越」姓の研究＝

地名と名字(苗字)とは、密接な関係にあるといえます。名字(姓)の約8割は地名由来からだという。姓氏関係の大家・故丹羽基二氏は「地名と苗字は密接な関係があって、名前(苗字でなく)が転化する場合、いったん地名に投射されて、地名から苗字になる。名前がそのまま苗字になることは少ない」(日本の地名―歴史・風土の遺産―講談社)のなかで述べています。戦国武将の武田信玄は常陸国(茨城県)那珂郡武田郷、今川義元は三河国(愛知県)今川庄、毛利元就は相模国(神奈川県)毛利庄、織田信長は越前国(福井県)織田庄一と、意外な場所がルーツになっています。武将たちの多くが自分の出自の地名を名乗っています。一般的な高橋や岡本、中村、渡辺などの名字も地名由来からきています。

●全国の山越地名

市津公民館主催講座の依頼を受けたのを機に、以前から興味を持っていた「山越」地名のルーツを探ることにしました。「山越」という地名の存在を知ったのは、およそ30数年前でした。北海道・函館の北方にある長万部(おしゃまんべ)周辺。地図上で山越郡という地名を見つけ、JR函館本線の山越駅も確認しました。実際に現地を訪ねて、山越小学校や山越郵便局を見つけました。すごく感動したことを覚えています。次に「山越」を見つけたのは京都市。新聞記者時代でした。甲子園での高校野球取材で、春と夏に大阪や京都をよく訪れていました。京都の「山越」は、ヤマゴエと読みます。洛西地域の広沢池の近くに存在し、取材の折には山越地区を訪ねました。周辺には、仁和寺や竜安寺、日本の国宝第1号に指定された飛鳥時代の木像「弥勒菩薩半跏思惟像」がある広隆寺、太秦(映画村)などがあり風情のある所です。その後に、京都の「市原」(前記)を見つけ、市原市との関係性があるのではないかと興味がますますわきました。

●橋木・佐野市にも「山越」

こうした経緯があって、最近になって栃木県佐野市に「山越」地名があるのを確認しました。この時は衝撃的でした（すでに愛媛県松山市にも、「山越」=ヤマゴエ=があるのは知っていた）。なぜ驚いたか。佐野市は平安時代に平将門の乱を鎮圧し、名を挙げた藤原秀郷氏の本貫地です。隣には室町幕府を開いた足利氏の本貫地の足利市があります。姓氏を語る場合に、「藤原秀郷流」という説明がよくあります。中世の時代、市原市は足利氏と深くつながります。この事実で、ますます「自分のルーツは佐野や足利など下野国なのではないか」という思いが強くなりました。もう現地に赴くしかない。今年の4月初めに、ワクワクした気持ちでルーツ探しの旅に出かけました。「山越」は佐野市郊外の国道293号沿いにありました。あちらこちらに「山越」と書かれた交差点や看板、自治会館、会社名などが目につき、念願の山越の町にきたのだという実感がわきました。後は、「山越」姓があるのか、多いのかという確認をすることでした。ところが、どの住宅の表札を見ても「山越」姓を見つけることができませんでした。散歩中の住民に、山越姓の所在を訪ねたところ、お寺の住職が「山越」だということを教えてくれました。密蔵院という寺院。住職に何うと「山越姓」は、山越地区では住職一家と身内だけだという。「足利市の鑿阿寺（ぼんなじ）の住職さんも「山越」ですよ」と、密蔵院とも関係が深いという。密蔵院は京都・醍醐寺の僧が中世（1437年）に開いた真言宗の寺院。かつては醍醐寺の末寺で、檀林（修行所）として、にぎわいを見せ、付近（山越地区）の土地を所領していたそうです。この経緯から「山越地名」は、代々住職を務めている「山越」姓の名残なのだろうか。

●出自は「醍醐寺」が関与？ 中世の足利氏とのつながり

次に訪れたのが、足利市の鑿阿寺。日本最古の学校といわれている「足利学校」に隣接する大寺院でした。室町幕府を開いた足利尊氏の祖の居館跡に建てられたという。足利氏の氏寺・本貫地でした。鎌倉時代に創建され、本堂は国宝。広大な境内に建つ、多くの建築物が国や県の重要文化財に指定されています。創建当初は高野山の末寺。室町時代から江戸中期までは、京都・醍醐寺の末寺。江戸後期から昭和20年までは真言宗豊山派大本山・長谷寺の直系末寺だったという。戦後は真言宗大日派本山の大寺。訪れた日は、あいにくと住職が所用で不在。社務所の執事に伺ったところ、「山越」姓は、足利市で住職だけではないかと答えてくれました。これはどういうことなのか。佐野市山越地区、足利市でも「山越」姓は少ないようだ。ともに共通するのは醍醐寺との関連性。市原市の「山越」姓は、醍醐寺と足利氏が絡んでいるのではないだろうか。

●結論として。「山越」姓は下野国（栃木）由来か

話が長くなりました。結論を急ぎます。市原市の場合。「山越」姓との関連性をみますと、醍醐寺との関係性が強いように思います。「市原市八幡にある飯香岡八幡宮の別当寺『神光山靈応寺（現在は廃寺）』は、中世の時代に京都・醍醐寺と強いつながりがあった」（市原八幡あれこれ・佐倉東雄著）、という。わたしが生まれ育った市原地区に、飯香岡八幡宮の

元宮といわれる市原八幡神社が鎮座します。その別当寺といわれた光善寺の山号は「神光山」。八幡の霊応寺と同じです。市原地区と飯香岡八幡宮は、秋季例大祭のときに「柳播神事」（県無形民俗文化財）で密接な関係にあります。能満地区にある真言宗（新義）の大寺・釈蔵院は、醍醐寺とつながる第60代の醍醐天皇（885～930年）の勅願寺と伝えられています。また、門前地区にある曹洞宗（創建時は臨済宗という）・宝積寺は、室町幕府を開いた足利尊氏の次男で鎌倉公方の基氏の創建。上総国は中世時代に足利氏が守護職をつとめた経緯があります。市原市では珍しい名字の「山越」。わたしなりの結論ですが、「山越」は、まず京都（山城国）で起こり、東国の下野国を經由して、足利氏と縁が深い市原市に伝播したと考えられます。「山越」姓は、下野を經由して市原市に住み着いた僧侶か仏教関係者の子孫（一族）ではないだろうか。山越は、北海道、栃木ではヤマコシ。京都と松山市ではヤマゴエと呼ばれています。語源を探ると、京都の山越は、「平安時代に貴族が、京から嵯峨に行く場合に山道を越える『千代の古道』から生まれたらしい。北海道の山越地区と愛媛・松山市の山越（やまごえ）地区も、「山を越えた」が語源。新潟県の山古志村（現・長岡市）も、ひょっとしたら「山越」だったかもしれません。なぜならば、新潟県は越後の国。「越」の国です。越の名前を使うのをはばかったから。考えすぎでしょうか。

余談ですが、京都の永観堂や国立博物館などに「山越阿弥陀図」（山の向こう側に阿弥陀が半身を現している図様）が国宝になっています。それらの「山越阿弥陀図」は、すべて鎌倉時代に制作されたということです。

【おわりに】

たかが地名。されど地名。地名はとても奥が深いです。歴史ある地名や名称は受け継がれていくべきものと思っています。由緒ある地名が昭和や平成の大合併で地名改変や消滅していきました。端緒となったのが昭和37年（1962）に施工された「住居表示に関する法律」でした。地名研究の第一人者・谷川健一氏は「法律の名の下に強制的に変更することは、不自然極まりない行為です」（地名と風土・小学館）と指摘しています。現在は、ひらがな名称の市名、美名の開拓地名が増えているのが現状です。わたしは、地名は文化遺産と考えています。平成から令和へと時代は移りましたが、歴史ある地名は、これからも消えることなく後世に受け継がれていくことを願っています。